

<論文>

コロナ渦中における民俗行事の原点回帰 —能登のアマメハギを中心に—

菅 根 幸 裕

コロナ渦中に於いて、民俗行事がどのように変化を遂げたかについて、石川県能登地方のアマメハギを中心に分析する。伝統とは常に新しい模索や挑戦を加えて変化させたものを後世に伝統と言っているに過ぎない。

根底は変わらずとも、その時代の変化に柔軟に対応することが、民俗行事の存続に繋がり伝統となるプロセスを例示することを目的とする。

キーワード

来訪神 アマメハギ 能登半島 民俗行事の柔軟性による継続

はじめに

2019年末より新型コロナウイルス（以下、コロナ）が世界中に蔓延し、早くも4年が過ぎた。世界保健機関（WHO）は2023年5月4日に新型コロナウイルス感染症に関する「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」（PHEIC）の宣言を終了すると発表した。同年12月の時点でもコロナは完全に収束していない。

コロナの感染拡大を防ぐため、世界各国でイベントが相次いで中止・規模の縮小を余儀なくされた。日本も例外ではなく、少子高齢化の問題に直面している民俗行事の存続の危機に拍車をかける状況である。一方で民俗行事の本来の意義について考える原点回帰を意識する契機にもなった。この原点回帰が全ての民俗行事に当てはまるとは言えない。しかし、民俗行事を後世に残していきたいと願う地域住民の働きにより、本来の民俗行事のスタイルにこだわらずコロナ渦中であっても柔軟に民俗行事を継承している地域がある。

本論ではユネスコ無形文化遺産に登録された「来訪神 仮面・仮装の神々」の一つである能登半島のアマメハギを例に、コロナ渦中で民俗行事がどのように行われ、アフターコロナを見据えてどのように継承しているのかについてまとめた。明らかになったのは、民俗行事が存続されている背景に、地域住民が時世の流れに柔軟に対応して次の世代へと民俗行事を繋いでいることだった。

本論で主に取り上げたのは、石川県能登町秋吉地区秋吉のアマメハギである。秋吉地区の秋吉公民館内に活動拠点を構え、アマメハギに扮するのは地元の小学生から中学生の子ども達である。全国的に来訪神に扮するのは地元の青年団に属する若者（少子化の影響で中高年も参加）が主体であることが多い。病気に対して抵抗力がない子ども達が、コロナ渦中で民俗行事に参加するのはそれなりのリスクが伴う。こうした懸念事項を念頭におき、アマメハギそのものを行うことにこだわらず、アマメハギが開催される時期以外にも、積極的にアマメハギの継承に取り組む秋吉の活動は国からも認められた。コロナ禍中においても継続している民俗行事の事例として貴重である。同じく「来訪神 仮面・仮装の神々」の一つに登録されている石川県の輪島市門前町皆川、五十洲のアマメハギ、輪島崎町と河合町の面様年頭は各々に役が設けられている。能登町のアマメハギと輪島市のアマメハギと面様年頭を比較しつつ、コロナ禍中どのようにアマメハギが行われたのか、民俗行事が継続する一例として本論が参考となれば幸いである。

なお、アマメハギの表記は資料によって、「あまめはぎ」と平仮名で表記されている。アマメハギと統一せず、参照した資料に応じては「あまめはぎ」と表記する。

1. 能登のアマメハギ

1-1. 能登町秋吉地区のアマメハギ

アマメハギとは季節の変わり目に訪れる来訪神を指し、アマメハギと面様を合わせた総称である。アマメハギは1979年2月3日に能登町のアマメハギと輪

島市のアマメハギ、面様年頭が合わせて「能登のアマメハギ」として国指定重要無形民俗文化財に指定された⁽¹⁾。アマメハギと面様年頭がひとくりにされたのは、面様年頭も古くはアマメハギと呼称されたためと考えられる⁽²⁾。2018年12月に8県10件の伝統行事で構成するユネスコ無形文化遺産「来訪神仮面・仮装の神々」の1つとして能登のアマメハギが登録された。輪島市、能登町で継承されるアマメハギと、輪島市の面様年頭が対象となり、2つの行事が1体となって登録された⁽³⁾。ユネスコ無形文化遺産の登録にあたり、アマメハギを来訪神と置き換えている。

アマメハギは1月～2月に行われ、耕作が始まる春を前に農民の怠惰を戒めようとしたのが起源と言われる。アマメハギは秋田県男鹿地方のナマハゲと似た点が多く、季節の節目に神様が家々を回るという日本人の信仰の原型を残していると言われている。アマメハギのアマメとは囲炉裏にあたっていると足にできるアザのような火だこ（温熱性紅斑）を指す。アマメを出刃包丁などで剥ぐのがアマメハギで、アマメを剥いだお礼にお菓子や賽銭（小銭）、餅などが家人から贈られる。アマメハギへお礼に渡される餅は、アマメの代用品として餅を渡していたという説がある。

岩手県九戸郡宇部村小袖（現在の久慈市）では、正月15日の晩にホロロンという来訪神に扮した子ども達が仮面を被って家々を回り、ナマミモチ（餅）・お菓子、賽銭をもらうアマメハギに似た民俗行事がある。ナマミモチ（餅）、つまり怠け者の象徴である火だこを餅に見立てて来訪神へ渡し、怠け心を取り除いていたのではないかという⁽⁴⁾。

山形県の日本海沿岸部の最北に位置する遊佐町の遊佐のアマハゲ（ユネスコ無形文化遺産 来訪神：仮面・仮装の神々）でも家人よりお供え品の一つとして餅がアマハゲに渡される。これらの来訪神と餅の関連性は定かではないが、アマメハギも家人から神事への対価として餅をもらっている。方言による違いはあるが、類似した意味で餅が渡されていると考えられる。

石川県能登町秋吉地区（秋吉、河ヶ谷、清真、宮犬）に伝わるアマメハギは、

小学生～中学生の男女が面を被る。この行事は江戸時代後期に既に行われていたと伝えられている。昭和30年代中頃まで、不動尊・秋吉地区一帯で広く行われていたが、現在では上記4集落のみで行われている⁽⁵⁾。1974年の「広報うちうら」によると、秋吉地区では1973年にアマメハギと、かつて行われていた左義長を後世に伝え残すため保存会（「広報うちうら」には“アマメハギ保存会”とは書いておらず“保存会”と記載）の設立が決まった。この2つの行事と切龍祭を含めて秋吉3代行事であったと伝えられている。保存会の初代会長の前田孫太郎氏の自宅で行われたアマメハギの様子がNHKで1972年1月3日に全国に紹介された⁽⁶⁾。同地区では昭和30年代までに、アマメハギをはじめとした民俗行事の存続に危機感を抱いていたようである。1980年発行の「広報うちうら」によると、昔はアマメハギを青年層が行っていたが、やがて小学生の役割となり、1974年から男児だけでなく女兒も参加するようになった⁽⁷⁾。女兒アマメハギに参加するようになった1974年は保存会が設立された翌年である。2018年は秋吉が7人中2人、河ヶ谷が6人中5人、宮犬地区が6人中2人、清真が6人中3人の地区外の子も達が務めた。秋吉地区アマメハギ保存会の会長の天野登氏は地区外からも「うちの子どもにもアマメハギをやらせたい」という話があったと語っている⁽⁸⁾。

秋吉地区のアマメハギは立春の前夜の2月3日の夜に行われる。

アマメハギが被る面はすべて手作りである。材料は地元で採れる夕顔（かんぴょう）、段ボール、厚紙、発砲スチロールと身近で手に入りやすい材料を使用している。子ども達は藁で編まれた簀と前垂れを身につけ、出刃包丁（模造品）でサイケと呼ばれる竹の入れ物（かつては酒を入れていた手桶）を叩きながら「アマメー」と声を出しながら家々を回っていく。

アマメハギは雨天決行で、雪が降っても、風が強くても、夕方から夜にかけて地元の家々を回っていく。筆者が見学した2023年2月3日は幸いに天候に恵まれ、極寒の雪道を子ども達が「アマメー」と言いながら歩いていた。夕焼けを背景に、のどかな農村の道路をテクテク歩くアマメハギの姿は好ましいもの



大人に先導されて家々を回る9名のアマメハギ（2023.2.3撮影）

であった。アマメハギはしっかりとした足取りで大人達に先導されながら1軒1軒民家を訪れていった。

秋吉地区秋吉のアマメハギの詳細は後述「3、能登町秋吉地区秋吉のアマメハギ」を参照頂きたい。

1-2. 輪島市門前町のアマメハギ

輪島市門前町のアマメハギは輪島市門前町（皆川地区、五十州地区）で行われる。1月6日を6日年越しといい、その夜にアマメハギが訪れていたが、現在は両地区ともに1月2日が開催日である。青年層や子ども達の減少のため、五十洲では1960年代後半から、皆月では2011年から1月2日に変更している。帰省客が正月3日には輪島市から離れて各々の生活拠点に帰るため、帰省者が参加しやすい1月2日に日程を変更をした。

皆川地区では1月2日の夕方5時頃に、地元の青年会の役員が皆月日吉神社の社務所に集まり、天狗面、ガチャ面二面、猿面と、それぞれ役が割り当てられる。アマメハギに使われる道具類は社務所に保管されており、着替えは役員が神主の指示のもと、役を決められた人へ着替えを手伝う。

その服装は、天狗は天狗面をつけ白髪を長く垂らし、烏帽子を被る。黄色い狩衣に差袴姿で、手には大幣を持ち、履物は下駄・雪駄・草履、天候によっては長靴を履く。ガチャ面は2種類あり、鼻が高く獅子鼻の歯を剥き出しにしている阿はノミと金槌を持っている。吽は口をへの字に結び、スリコギを持っている。両面（阿、吽）ともに緑色の麻で作った小袖を着用する。猿面の色は赤で目を大きく見開いている。衣装はガチャ面と同じで、餅を入れる白地の大きな麻袋を持つ。上記4名のアマメハギは天狗面が神主、ガチャ面2名が脅かし役、餅の運び役のサル面が1組となり、この一行が2組準備され、忌のかかった家を除く地区の全戸を廻る。^{(9) (10)}

アマメハギ一行4名の前に子ども達（小学生が主）が大声で「面様ござった」とふれて歩く。

アマメハギは子どもがいる家に入るとき、「オー、オー」と声を上げて戸を開ける。家に上ると、神棚のお祓いが行われる。神棚の前に天狗をはじめとする一行が腰をおろしてお祓いを行い、次に当主と家族全員のお祓いを済ませる。神事が一通り終わると、天狗の合図のもと、ガチャ面と猿面が子ども達を脅し、良い子にすることと言いかせさせる。アマメハギが脅かし終わると家族が餅や祝儀をのせた盆を神主に手渡し、神主から猿面へ渡される。アマメハギには皆月の青年会員が扮し、青年会には中学卒業から数えて37歳までの皆月出身の男性が属している。以前は25歳前後の厄年の若者が担当していたが、かつては100名以上いた会員も2020年には28名まで減少した⁽¹¹⁾。

五十洲のアマメハギは1月1日の午後、地区の壮年会の役員により神社の倉庫に保管されていた衣装などを集会場である壮年倶楽部まで運ぶ。1月2日の午後3時頃から壮年会のメンバーが集まり、壮年会の会長を中心に天狗面、ジジ面、ババ面、などの役を決める。以前は25歳の厄年の成人男子が役を担っていたが、少子化に伴い若者が減少したため10代の男子まで面をつけるようになった。⁽¹²⁾

天狗面とジジ面、ババ面の3人のそれぞれ手拭いを頬かぶりする。天狗面は

朱色で鼻が高い天狗面に烏帽子を被り、薄黄色の唐草模様の狩衣を着て、薄青色と白地に分かれた指貫をはき、手に大幣を持ち、下駄を履く。ジジ面は口を結んだ鼻高面をつけ、頭には兜を被り、薄水色の小袖のようなものの上から甲冑をつける。ババ面は口を開いた鼻高面をつけ、頭髪を模した白い麻紐を頭から長く垂らす。衣装は青地に白十文字の模様がついた小袖を着て、白の括袴をはく。ババ面はノミと金槌を持ち、ジジ面はスリコギを持っている。この3人が主役で、他にコイドラ（肥俵・餅担ぎ）、提燈もちがいる。五十洲神社に参拝してから、地区の東から西にかけて1軒1軒巡訪する。皆川と同様に忌かった家には立ち寄らない。家に着くと提灯もちが、アマメハギ一行がきた旨を知らせ、続いて天狗面、ジジ面、ババ面が続く。家の中に上がるのはこの3名だけである。家に着くと天狗が神棚の下に進んで着座しお祓いが行われる。子ども達を脅かすのはジジ面とババ面で、こちらも逃げ回る子ども達を追いかけ、良い子でいるように説く。お祓いが終わると家主から神主へ餅が渡され、また次の家へと移動する^{(13) (14) (15)}。

五十洲では担い手不足により2009年から五十洲神社で神事のみだったが、ユネスコ無形遺産の登録を契機に2019年から再開された。2020年の年初はコロナが全国へまん延していなかったため、アマメハギ及び関連行事が開催された。しかしコロナの感染拡大に伴い2021年から自粛せざるを得なくなった。関連行事として1月3日に餅宝引（餅ホービキ、もちほうひき）がある。複数の紐の中に1つだけ当たりが括られている。もう片方の紐を引き当りを引く行事で、景品はアマメハギが持ち帰った餅やお供えである。2020年のコロナ時には五十洲集会所で開催されたが、それもかなわなくなった。参加者に子ども達や高齢者がいるためやむ負えない苦渋の決断であった。

1-3. 輪島市輪島崎町と河合町の面様年頭

輪島市輪島崎町に古くから伝わる厄除けの神事がある。面様年頭と呼ばれる来訪神で、1月14日と1月20日に行われ、14日は「おいで面様」と呼び、山側

から順に家々を訪問し、20日は「お帰り面様」と呼び海側から順に訪問し、山に帰っていく。1月14日は小正月にあたり、輪島前神社の仮面をつけるので面様と呼ばれる。

輪島前神社が選んだ氏子の小学生2名(男児)が男面(串柿面)と女面(女郎面)として夫婦神を模す。面様は榊(さかき)の枝を持ち、差袴をはき角衣を着て面をつけ、その上から大黒頭巾のようなものを被る。面様は無言で家々を回るのが習わしで、共人の付き添いのもと、氏子の家の戸口を榊で叩いて無言のまま家に上がる。その家の神棚に一礼してからお祓いをする。「面様、おめでとうございます」と家人から年賀の挨拶を受け、差し出されたお初穂を受け取り家から出る。漁業に従事する人の多い輪島崎町では、厄払いと同時に、豊漁を祈る行事として続けられてきた。また、子どもの正月の遊びとしても受け継がれており、各戸をまわってもらう餅は、当番の子どもの家で、ぜんざいや雑煮にして子どもたちに振舞われた。^{(16) (17) (18)}

輪島市河合町の重蔵神社でも1月14日に面様年頭が行われる。この日は年越しともいい、年越し面様とも呼ばれる。「串柿面(くしがきめん)」と「女郎面(じょうろうめん)」という面をつけて面様に扮し、烏帽子狩衣を着て、手には幣束を持つ。面様になるのは、河井町に住んでいる「宮年寄り」2名と社事係2名であり、輪島崎町の面様と異なり、成人が担う。「面様」は「メンサマネントウ」と唱えて、各家をまわり、神棚に礼拝し、御幣で祓い清め、祝詞を奏上する^{(19) (20)}。

年頭にのみ行われる面様だが、時期を問わず面様を見学できる施設がある。2019年5月4日から輪島キリコ会館の3階で面様年頭の衣服を着用した2体のモニュメント、面、映像が見られる面様年頭の展示がはじまった。アマメハギも展示されている。能登半島各地ではキリコと呼ばれる大きな奉燈を使った祭りが知られ、日本遺産「灯り舞う半島 能登～熱狂のキリコ祭り～」とユネスコ無形遺産のアマメハギと面様年頭が一堂に会する施設である^{(21) (22)}。

海と山といった自然に囲まれた地域で派生した面様年頭とキリコ祭りが行われているのは興味深い。面様は年が明けて山から麓(海側)へ降り、神事を終

えると山へ戻っていく。キリコ祭りは祇園信仰や夏越しの神事から発生したと言われ、農漁村を守る神を奉る。能登半島は日本海に向けて半島が突き出しており、低い山と丘陵地が多く、半島は海で囲まれている。独自の地理条件が山と海から訪れる来訪神を祀る風習を生んでいる。能登半島は民俗行事がひしめく地域とも言えよう。

2. コロナ渦中のアマメハギ

2-1. 2020年のアマメハギ -コロナ感染拡大直前-

コロナが日本全土に拡大した2021年及び2022年、緊急事態宣言が解かれ最初の開催となった2023年に着目し、コロナ感染拡大前後のアマメハギについてまとめた。資料は能登町中央図書館に保管されている北國新聞と北國中日新聞である。なお、北國新聞はCD-ROMにて保管されており、キーワードは「アマメハギ」「来訪神」「ユネスコ無形文化遺産」の3つで検索し、期間は2020年1月～2022年12月の記事とした。さらに、2023年のアマメハギ開催日の当日と翌日について現地で直接手にした北國新聞から抜粋している。北國中日新聞は紙面での保管のため、2022年1月～12月の新聞から目視にてアマメハギに関する記事を抜粋した。補足として北國新聞と中日北國新聞のWebサイトも参照している。

2020年の初めは、コロナの感染が能登半島へ辛うじて及んでいなかった。そのためアマメハギに関連する行事がコロナの感染拡大直前に行われた特筆すべき時期である。輪島市門前町皆月では1月2日にアマメハギが例年通り行われ、面を着けた男衆が家々を巡り、子ども達や住民の怠け心を諷めた。皆月では天狗や「ガチャ」と呼ばれる鬼、猿の面を着けた15～38歳の青年会員やOB等25人が約100世帯を訪れた。

門前町五十洲のアマメハギは、前述したように過疎化の影響で2009年を最後に五十洲神社で所作を演じるのみだったが、ユネスコ無形文化遺産の登録を機に、2019年から風習を復活したばかりであった。天狗、ジジ、ババ、と呼ばれ

表1：北國新聞 2020年

開催日	市区町村	場 所	内 容	補 足	発行月日
1/2	輪島市門前町 皆月・五十洲	同地区民家	アマメハギ開催	皆月：青年会員（15-38歳）・OB等25人 約100世帯訪問	1/3
1/3	輪島市門前町 五 十 洲	集 会 所	餅宝引開催	五十洲集会所にて 住民や帰省客ら20人が参加	1/4
1/13	輪 島 市 大 野 町	同地区民家	アマメハギ開催	地元の小学生・中学生計6名 民家9軒を訪問	1/14
1/15	能 登 町 秋 吉	秋吉公民館	アマメハギの衣装製作	アマメハギに扮する子ども達用 前垂れと簀作り (2020年は6枚づつ新調)	1/16
1/17	能 登 町 秋 吉	秋吉公民館	ランプシェード（粘土）製作	アマメハギに扮する子ども達を 出迎えるため玄関に置く	1/18
1/22	能 登 町 秋 吉	秋吉公民館	公民館に巨大アマメハギのオブ ジェ設置	オブジェ： 高さ約3.5m、胴回り約4m アテ・杉の木と葉、竹を使用	1/23
2/7	秋 田 県 男 鹿 市	男 鹿 市 民 文 化 会 館 大 ホール	(1) 来訪神サミット2020 in Oga 参加のお知らせ	ユネスコ無形文化遺産登録を記念 初めての開催	2/4 ※1記事 に2内容
2/3	能 登 町 秋 吉	秋吉公民館 同地区民家	(2) アマメハギ開催	能登町秋吉 年長児～中学生迄の9名が民家約 30軒を訪問	
2/7	秋 田 県 男 鹿 市	男 鹿 市 民 文 化 会 館 大 ホール	来訪神サミット2020 in Oga へ 参加	輪島： 能登のアマメハギ・面様年頭保存会 能登： 秋吉地区アマメハギ保存会が参加	2/8
6/12	能 登 町 秋 吉	秋吉公民館	アマメハギグッズの作成	開館するアマメハギ伝承館の来館 者へ配布	6/13
6/23	能 登 町 秋 吉	秋吉公民館	「能登の来訪神行事 アマメハギ伝承館」 オープニングセレモニー	2020年4月19日公開予定だったが 新型コロナウイルスの影響で延期されてい た	6/24
10/21	能 登 町	能 登 町 役 場	県のふるさとの匠にアマメハギで 使う簀作りを継承する匠・計3名 が認定	ふるさとの匠：2001年に設置 伝統技能を持つ人へ認定	10/22
11/11	金 沢 市	金 沢 広 坂 合 同 庁 舎	能登町秋吉公民館が 豊かなむらづくり全国表彰事業に て北陸農政局長賞に表彰	遊休農地を活用した菜の花畑でア マメハギの紙芝居上演など地域活 性化のけん引が評価	11/12
2021年 1月 2月	輪 島 市 能 登 町	各 地	新型コロナウイルス感染拡大を受 けアマメハギの中止又は規模を縮 小して開催	五十洲・神社で神事 皆川・玄関先で神事 秋吉・開催（外部の見学自粛）	12/31

※北國新聞を元に菅根・甲村作成（2023）

る面を着けた3名が地区のほぼ全世帯を回る。2020年は県外から帰省した出身者ら3名が12軒を回った。参加者の40代男性2名は約40年ぶりに面を着けて参加した。アマメハギに関連して餅宝引も復活し、翌日の1月3日に行われた。

子ども達、帰省客と地元の住民が餅宝引に参加し、紐を一斉に引き、当りの5円玉の束を引き当てた人から歓声が上がった。会場は五十洲集会所である。

輪島市大野町では1月13日にアマメハギが行われ、地元の小学生と中学生の生徒計6人が鬼の面を被り民家9軒を回った。大野町では1964年を最後にアマメハギが行われなくなったが、2013年に町子ども育成会により復活した。

能登町秋吉地区でも2020年2月にアマメハギの準備が行われていた。秋吉の秋吉公民館でアマメハギを出迎えるランプシェード(粘土を本焼したもの)作りに住民らが参加した。このランプシェード作りは、アマメハギがユネスコ無形文化遺産に登録された後、盛り上げる狙いで2年前から始まり、来訪先の玄関に飾られた。それと同時にアマメハギに扮する子ども達が身につける簀と前垂れも作られた。「こばせまた」と呼ばれる編み機に糸を巻きながら藁が編み込まれ、2月3日に能登町秋吉、河ヶ谷、清真、宮犬の4地区でアマメハギが通常どおり開催された。秋吉地区では年長児から中学生までの9人が同エリアの家々約30軒を回った。

同年2月7日に秋田県男鹿市で開かれた「来訪神サミット」に石川県から輪島市の「能登のアマメハギ・面様年頭保存会」と能登町の「秋吉地区アマメハギ保存会」が参加した。他の地域に伝わる来訪神行事を担う地域でも少子化に伴う担い手不足は課題である。お互いに意見を交換し、民俗行事をどのように繋げるか議論が交わされた。地域の活性化のためにも民俗行事を存続させたいという願いはどこも同じである。

ところが、コロナの感染防止のため、民俗行事の開催に伴い不特定多数の人が集まり、三密(密閉、密集、密接)になる状況を良しとしなかった。先行きの見えない不安を払拭するかの如く、4月19日から公開予定だった「能登の来訪神行事 アマメハギ伝承館」で6月23日に念願のオープニングセレモニーが行われた。秋吉公民館に隣接する旧秋吉保育所の2部屋を改修し、アマメハギの資料保存、行事継承の拠点として活用されている。

オープニングセレモニーでは秋吉公民館で地元の住民が作った手作りのアマ

メハギのグッズ（鬼の面と木製のミニ包丁をセットにしたグッズ）が希望者に配布された。

コロナの収束が望まれる一方、国内での新型コロナウイルス感染症の感染者は230,304例、死亡者は3,414名となり、感染は広がり続けた⁽²³⁾。内閣感染症危機管理統括庁は「新型コロナウイルス感染症が流行してから初めての冬を迎えることとなります。命と暮らしを守るためにも、みなさまには、年末年始を静かに過ごすための工夫をしていただくよう、ご理解とご協力をお願いします。「年末年始」のポイントは、以下の2つです。「飲食は家族、いつもの仲間と」「帰省は慎重に検討を」と呼びかけ、国民へ年末年始の帰省を自粛するよう求めた⁽²⁴⁾。

神事や関連する民俗行事の内容を変更するのは容易ではない。苦渋の決断の末、各地の民俗行事が開催の中止、関係者のみで神事を執り行うなど簡略化も相次いだ。来年こそは開催できればと願う人々との想いとは裏腹に、2021年はコロナの拡大が更に広がった。よって2020年はコロナ拡大前の最後の開催となり、2021年は開催には慎重にならざるを得ない状況となった。担い手となる帰省の自粛は暫く続いたが、民俗行事を行う意味を問い直し、見直す動きもでてきた。開催が困難であれば、民俗行事そのものにこだわるのではなく、出来ることを模索して伝統を繋いでいく動きが2021年以降顕著に現れた。

2-2. 2021年のアマメハギ - コロナ感染拡大に伴い中止・規模の縮小 -

2020年12月31日の北國新聞には、2021年のアマメハギについて、「アマメハギ 静かに」「中止、玄関先で神事のみ」と報じた。輪島市門前町五十洲は仮面の男衆が約30世帯を回る予定だったが中止を決めた。感染拡大への考慮、帰省の自粛に伴い担い手が集まらない可能性が高まったためである。先に述べたように2019年に同エリアのアマメハギは復活したばかりである。五十洲神社で所作を行うのみで、これらから盛り上げていこうと機運が高まっていた時期に苦渋の決断であった。門前町皆月では青年会のメンバー 20～38歳の男性ら10人

コロナ渦中における民俗行事の原点回帰 菅根

表 2：北國新聞 2021年

開催日	市区町村	場 所	内 容	補 足	発行月日
1/2	輪島市門前町 皆	同地区民家	アマメハギ開催（縮小）	玄関で神事のみ 青年会員ら10名が約100世帯回った	1/3
1/12	能 登 町 秋 吉	秋吉公民館	アマメハギの衣装製作	アマメハギに扮する子ども達用 簀と前垂れ作り（5枚前後新調）	1/13
1/15	能 登 町 秋 吉	秋吉公民館	巨大アマメハギのオブジェの衣替	アマメハギの青鬼の面は3代目 悪疫退散	1/16
1/17	輪 島 市 大 野 町	ふれあいプ ラザ 鶴巣	アマメハギの鬼面の新調・修復	鬼面の材料は杉の皮 大野町はアマメハギを中止	1/18
1/28	能 登 町 秋 吉	秋吉公民館	竹灯籠に明かりを灯したアマメハ ギの実演	秋吉・報道機関・観光客は自粛の 上実施 河ヶ谷・清真・宮犬は中止含めて 検討	1/30
1/30	能 登 町 秋 吉	県能登少年 自然の家	小学生にアマメハギの紙芝居披露	県内の小学生12名が参加 アマメハギの映像も視聴	2/1
2/2	能 登 町 秋 吉	秋吉公民館 同地区民家	アマメハギ開催（簡略化）	地元の小中学生4名 約30軒を回り、所作のみ行った	2/3
			北國新聞・デスク日誌 「アマメハギの切り絵」	伝統継承の想いを書いたコラム	2/20
12/7	能 登 町 秋 吉	アマメハギ 伝 承 館	アマメハギの資料・小道具など紹 介	地元の小学3年生14名 アマメハギの実演も見学	12/9
12/14	東 京 都	文 化 庁	2021年度文化庁長官表彰 県内から2氏	石川県からアマメハギ保存会顧問 天野登氏ほか1名が選出	12/2
12/15	能 登 町	能 登 町 役 場	アマメハギ保存会顧問の天野登氏 文化庁表彰を報告	同氏の約40年に渡るアマメハギの 継承発信に務めた功績が認められ た	12/16
2022年 1月2日	輪島市門前町 皆月・五十洲	同地区民家	皆川では2年ぶりに家上がり 神事（簡略化）	五十洲・五十洲神社で神事のみ	12/30

※北國新聞を元に菅根・甲村作成（2023）

が約100世帯を訪れた。玄関先で「面様ござったぞ」と声を掛け、息災を祈りお祓いをするにとどまり、家の中に入って所作は行われなかった⁽²⁵⁾。能登町秋吉では2021年2月2日にアマメハギが行われたが、アマメハギに扮する子ども達への感染を防ぐため、例年受け入れている報道機関や観光客に自粛を求めた。

民俗行事の中止や簡略化はやむを得ないが、それでも普及活動は地元の人々により続けられた。例えば、輪島市大野町では1月17日にふれあいプラザ鶴巣でアマメハギの面が新調された。同町のアマメハギは中止となったが住民15人が集まりスギの皮を小刀などで面の形に切り抜き、ペンキで鬼の顔を描き、簀の補修が行われた。秋吉のアマメハギでは⁽²⁶⁾、小学1年～中学2年生の4名が

雪の降る中30世帯を回り、家の中には入らず玄関先での訪問となった⁽²⁷⁾。前日の2月1日は、アマメハギ伝承館紙芝居支部会のメンバーによる出張授業も開かれた。石川県能登少年自然の家で県内の小学生12名にアマメハギを題材にした紙芝居、行事の様子映像の鑑賞が行われた。児童はマスクを着用し、間隔を空けて畳に座り、話に熱心に聞き入っていたという。

能登町秋吉地区の文化活動における功績は国にも認められ、2021年文化庁長官から同地区の秋吉アマメハギ保存会顧問の天野登氏が表彰された。アマメハギの伝承活動、担い手の育成そして天野氏の自宅を改装した資料館を開設し、町の活性化に役立てたいと長年活動に取り組んだ成果である。

また、秋吉地区では開館したばかりのアマメハギ伝承館で、感染対策に注意を払いながら紙芝居が披露された。見学に訪れたのは能登町の小学3年生14名で、アマメハギに扮した秋吉公民館紙芝居支部のメンバーによる紙芝居やアマメハギに使われる道具の説明に耳を傾けた。

文化を継承するにあたり、地域住民が集まれるコミュニティスペースを確保するのは一つのポイントになる。度々取り上げている能登町の秋吉地区は、経費をかけて新しい建物を建てるのではなく、保育園として使われていた建物を改修して利用している。公民館と繋がっているため、行事に必要な準備を行うにも利便性が高い。展示・保存と活動を同一拠点にコンパクトにまとめ、そこが地元の人々のコミュニティスペースとして活用されている。アマメハギ保存館に来られない子ども達のために、出張授業でアマメハギの実演を見せ、紙芝居で子ども達に楽しく学んでもらう秋吉アマメハギ保存会のメンバーの活動も重要である。

2020年の北國新聞に比べ、アマメハギの中止・規模の縮小のせいも、2021年はアマメハギに関連する記事がやや減っていた。翌2022年も感染がおさまる見通しがたらず、引き続き自粛が求められるのであった。

2-3. 2022年のアマメハギ - コロナの感染予防と文化継承の両立 -

表3：北國新聞 2022年

開催日	市区町村	場 所	内 容	補 足	発行月日
1/2	輪島市門前町 皆	同地区民家	アマメハギ開催（簡略化）	16～37歳の皆月青年会員8名が約100世帯 家にながかり神事(子どもへの戒めは無)	1/3
1/7	能 登 町 秋 吉	秋吉公民館	アマメハギの衣装製作	アマメハギに扮する子ども達用 前垂れと簀作り (2022年は5枚つつ新調)	1/8
1/10	輪 島 市 大 野 町	同地区民家	アマメハギ開催	地元の中学生6名が民家6軒を回った 感染状況が落ち着いたため実施	1/13
1/14	輪 島 市 門 前 町	もんぜん 児 童 館	アマメハギの体験	地元の児童40名が参加 皆月青年会のメンバー4名が実演	1/16
1/25	能 登 町 秋 吉	秋吉公民館	アマメハギの衣装が完成	本番に向け試着が行われた 当日は小中学生が身にまとう	1/26
2/3	能 登 町 秋 吉	秋吉公民館 同地区民家	アマメハギ開催（簡略化）	新型コロナウイルスの感染再拡大を受け 2022年もメディアや観光客へ非公開	2/2 ※1 記事に 複数
1/2	輪 島 市 皆月・五十洲	同地区民家	アマメハギ開催（簡略化）	皆月・各家で神事 五十洲・所作のみ	
2/3	能登町秋吉・ 河ヶ谷・清真・ 宮犬	秋吉公民館 同地区民家	アマメハギ開催（簡略化）	小学1年生～中学3年生の計6名 26世帯を回った・玄関で所作のみ	2/4
			北國新聞・記者ノート 「2年連続のお断り」	コロナ渦中でも後世に伝統を継承した い世話役の苦渋と判断をまとめた	2/25

※北國新聞を元に菅根・甲村作成（2023）

2022年のアマメハギはコロナの感染状況を考慮しつつ、一部の習わしを簡略して行われた。例年通りとはいかないアマメハギに、物足りなさや感染対策の聞き合いが各地域でみられた。状況を鑑みながらも担い手の事情もあり、地域によってどこまで行事を行うか対応が分かれた。

輪島市門前町の皆川では、家にながって神事を行ったが子ども達への戒めは見送られた。面を被った16～37歳の皆月青年会員8名が約100世帯を回り神棚を祓った。門前町五十洲では昨年と同様に五十洲神社のみが行われた。輪島市大野町ではアマメハギに扮した地元の中学生6名が、民家9軒を回り子ども達を戒めた。大野町のアマメハギは50年以上前に途絶えたが、2013年に町子ども育成会アマメハギを復活している。

能登町秋吉地区秋吉では1月にアマメハギ開催に向けて簀と前垂れが各5着

新調された。衣装が完成すると試着が行われ、準備は着々と進んでいた。昨年
に続き報道機関や観光客に自粛を求め、内輪での開催となった。当日は小学1
年生から中学3年生までの6名が秋吉公民館を出て26軒を回った。北國新聞の
記者ノートには能登町の4集落（秋吉、河ヶ谷、清真、宮犬）で行われたが、
取材を受け入れなかった世話役は「子どもに何かあれば、来年以降は続けられ
なくなる」と、ぎりぎりの判断を下したと打ち明けられた旨を書いている。「熱
心な表情を見せる世話役や子どもたちから、地域に寄せる熱い思いを感じずには
はいられなかった」とコラムを締めている。

民俗行事の継続または復活の背景には、少子化の影響で伝統が続けられなく
なる地域の経済を何とかしなくてはという危機感がある。地域の伝統とはその
地域に昔から伝わる独自のルールも伴う。民俗行事を行えば、ある程度近隣住
民との付き合いも求められ、多様化する生活スタイルの現代社会と反すると感
じる人もいであろう。その結果として若者は地元を離れ、都会や地元から離
れた地で新たな生活を築く。独自のルールを地域の結束と称すれば聞こえは良
いが、結果として少子化が進んでいるのは紛れもない事実である。

秋吉地区秋吉では数年前から地元の子も達だけではなく、関心があれば他の
地域の子も達がアマメハギに扮するよう地域外に門を広げている。昔のやり
方に縛られず、伝統を現代にカスタマイズしつつ、継承する難しさ。それがコ
ロナによって更に危機に追い込まれたときに、「伝統とは何か」原点回帰に目
を向けるきっかけであったのであろう。

誰のための民俗行事か。地域活性化のために活用されるのも然るべきである。
しかし、その原点を見失ってしまえば必然的に民俗行事は衰退する。コロナが
もたらした災難は、「伝統とは何か」原点回帰に目を向ける契機となり、民俗
行事のあり方を問い、見直されるようになったのだ。

2-4. 2023年のアマメハギ –受け継がれる民俗行事–

表4：北國新聞 2023年

開催日	市区町村	場 所	内 容	補 足	発行月日
2/3	能 登 町 秋 吉	秋吉公民館 同地区民家	アマメハギ開催	小学生9名が25世帯を回った マスコミ・観光客を3年ぶりに受入	2/4

表5：北國中日新聞 2023年

開催日	市区町村	場 所	内 容	補 足	発行月日
1/31	オンライン	オンライン	「能登・祭りの環」関係人口創出事業の本年度意見交換フォーラム	学生や祭り関係者 自治体担当者ら約40名	2/1
2/3	能 登 町 秋 吉	秋吉公民館 同地区民家	アマメハギ開催（簡略化）	アマメハギに扮するのは中学生迄 中学生が伝統の継承を誓う	2/4
2/3	能 登 町 秋 吉	秋吉公民館 同地区民家	アマメハギ開催	最年長の小6「これからも下の子たちを引っ張っていけるよう頑張る」	2/4

※北國新聞を元に菅根・甲村作成（2023）

2023年1月31日に「能登・祭りの環」関係人口創出事業の意見交換会がオンラインで開催された。学生や祭りの関係者、自治体関係者が人口減地域で祭りを続ける方法について話し合った。論点は2015年に日本遺産第1号に認定された「能登のキリコ祭り」について4班に分かれて意見交換が行われた。10年以上前より、キリコを担ぐ担い手が高齢化の影響で不足しており、祭りの存続に主催者は危機感を抱いている。若い世代に関心を持って貰えるよう、キリコに関するグッズの商品化、SNSで情報発信、祭りに参加するにあたり「お泊り会」を開催する案が出てきた。コロナの影響でキリコの規模の縮小や中止が相次ぐ中、キリコの魅力を再発見する意見交換会となったようだ。

アマメハギと異なり、キリコを担ぐ際には多くの人出が必要となる。三密回避が難しいため例年通りの開催が出来ないのはやむ負えない。一方、アマメハギがコロナで同じような課題に直面している中、コロナ渦中でもアマメハギを忘れないように、アマメハギに関する普及活動が行われた。コロナの感染が少しずつ落ち着いてきた背景もあり、同年2月3日に能登町秋吉などでアマメハギが行われた。3年ぶりに地元関係者以外に公開され、筆者もアマメハギに同

行した。北國新聞は秋吉のアマメハギを紹介し、玄関先で所作を行い住民から歓迎されている写真が掲載されている。

北國中日新聞も同地区のアマメハギを紹介し、住民からアマメハギに扮した子ども達がお菓子を受け取る写真が掲載されている。アマメハギ伝承館館長・秋吉遊休農地対策部会事務局の長谷信一氏は「子どもは1人減り、2人減りだが、昔ながらのやり方でやっていければ」とマスコミの取材に答えている。同じくマスコミの取材に対し、最年長の小学6年生の児童は「これからも下の子どもたちを引っ張っていけるよう頑張る」と意気込みを語っていた。

3. 能登町秋吉地区秋吉のアマメハギ

3-1. アマメハギ資料館

筆者は事前に秋吉地区秋吉のアマメハギが2023年から観光客を受け入れる案内を能登町の公式HPで閲覧した。念のため能登町役場へ連絡を入れ、2023年2月3日に開催されるアマメハギの見学の許可を得た。アマメハギ伝承館も見学したい希望を伝えると、同伝承館に隣接する秋吉公民館からアマメハギが出発するので、館内の見学ができるかは分からないので現地で直接確認する旨の回答を得た。アマメハギの邪魔にならないように見学することと取材許可のお礼を伝え、同日能登町へ訪れた。

秋吉公民館とアマメハギ伝承館は通路で繋がっており、秋吉公民館側から右側の展示室には実際にアマメハギで使われた面、簀、前垂れ、サイケ、ボンボロ（竹製の棒）、出刃包丁（模造品）、藁靴などが展示されている。隣接するイベントルームには囲炉裏が設けられており、囲炉裏の目の前にある大型モニターは秋吉や奥能登のアマメハギ、日本各地の来訪神を紹介する映像が流れている。解説用の看板にはQRコードが記されており、複数言語でアマメハギの説明を読み取れるようになっている。

前出した長谷氏は能登町秋吉地区の出身で、自身も子どものときにアマメハギに扮した経験を持つ。アマメハギは農耕行事であり2月4日の立春の前日に、

アマメハギが家々を回ることによって寒い冬が終わりを告げ、春に向けて働くように知らせている。アマメハギは地元の子どもの遊びの一環でもあったという。昭和50年代に報道機関向けに紹介する際に、アマメハギが家々に上がっているとされていたが、実際は家の庭先や玄関で家人にアマメハギが出迎えられるに過ぎなかった。家人に上がっても良いと招かれれば上がる場合もある。報道機関向けのパフォーマンスとして誇張されたのではないかと思われる。

秋吉地区アマメハギ保存会が設立される以前は2～3名毎に子ども達がグループでまとまって各々の家から出発していたが、秋吉地区アマメハギ保存会が設立されると同保存会の家から子ども達はアマメハギに扮し出発するようになった。現在は秋吉公民館がアマメハギの主な活動拠点であり、出発地も秋吉公民館である。アマメハギの活動を運営するのは保存会、区長、区の委員、保護者である。保護者の意向でアマメハギに参加させたい子どもの参加は誰でも認められている。2018年のユネスコ無形文化遺産の一つに能登のアマメハギが登録されたのを機に、アマメハギに関心を持つ保護者が増えたようだ。子どもの親が県外や遠方に住んでいても、祖父母の所縁でアマメハギに扮する子どももいる。

輪島市に伝わるアマメハギと異なり、能登町のアマメハギには役や序列はない。能登町のアマメハギは神仏に関りは無く、アマメハギを行う前にお祓いもしないので神社から出発をしない。輪島市のアマメハギや面様が神社でお祓いをしてから家々を回ることに対し、秋吉公民館で着付けを行ってから出発をする。実際にアマメハギに扮した子ども達に同行して民家を回った際に、寺院(道場)にも他家同様に入っていた。輪島市門前町や五十洲が神仏の影響を受けているのに対し、秋吉のアマメハギは地域のコミュニティが主体となっている。

保存会では活動拠点であるアマメハギ伝承館へ地元の小学生を招き、アマメハギの実演を見せるだけでなく、アマメハギの出張授業も行っている。2023年2月4日は能登青少年交流の家へ保存会のメンバーが向かい、地区外の子どもの達へアマメハギを体験する行事を予定していると長谷氏から伺った。

アマメハギ伝承館を見学していると1帖ほどのアマメハギの大きな版画の前に置かれている、中央に白抜きの？（はてな）マークがついた横長の黒い大きな布に気が付いた。大切に黒い布に覆われて保管されているのは、アマメハギ伝承館が保育園だった頃に大人達が作成したアマメハギの紙芝居である。長谷氏によると秋吉遊休農地対策部会では菜の花が開花する4～5月頃に、菜の花が咲き誇る遊休農地に子ども達を集めアマメハギの紙芝居を読み聞かせ、紙芝居が終わると菜の花畑で遊ばせるイベントを開催している。暑い夏が終わり、収穫の秋が過ぎ、寒い冬が訪れたとき、子ども達は菜の花が美しく咲く春を楽しむに待ちながら、アマメハギに扮するのを心待ちにするのであろう。

コロナの感染拡大を受け、秋吉地区でもアマメハギの開催の是非について重ねての慎重な協議が重ねられた。その結果、「アマメハギは見せ物ではない」「地域である程度やっていこう」との結論が出た。例年であれば報道機関や観光客を受け入れていたが、各方面に自粛を求めた。長谷氏が当時の想いを語ってくれた。「本来アマメハギは見せ物ではない。伝統とは何かを見直す機会だった」アマメハギの本来の意味を地域で見直し、原点回帰に至ったのである。

念のためコロナの感染対策のために「自粛を願います」と各々の玄関には貼り紙が貼られていた。なお2023年のアマメハギは一般公開されたので、自粛を要請する貼り紙は貼られていなかった。

3-2. アマメハギに扮する

秋吉公民館の入り口に続く道の両脇に竹灯籠が幾つも置かれていた。アマメハギが公民館を出ていく夕方になると竹灯籠に明かりが灯され、アマメハギの足元を照らしてくれる。北國新聞にも紹介されていたが、秋吉では竹が採れるため、足元を照らす竹灯籠が地元の人々により作られた。竹灯籠は痛めば新しい灯籠に作り替えられ、雪道を歩くアマメハギを温かく見守る。

アマメハギの開催に向け、着々と準備が進められるのだが、アマメハギに扮するにあたり欠かせないのが簀と前垂れである。簀と前垂れは、匠と呼ばれる

ベテランの職人（80前半1名と70代後半1名）を筆頭に、一つ一つ手作りされている。製作の場も秋吉公民館である。前年に製作された簀と前垂れを継続して使う場合もあるが、基本的にその年にアマメハギになる子ども達の体型に合わせて毎年製作されるという。「今年はこの家の子が出るかもしれない」と事前に打ち合わせが行われ、子ども達の体格に合わせて簀と前垂れが準備されていく。例年1月頃から製作に取り掛かり、寒の水に浸しアクをとった藁を使用している。以前は韓国から輸入された藁を現在は隣接する珠洲市の藁が使われ、下準備を含めると製作に約1ヶ月かかる。2023年は簀と前垂れは各5着ずつ作られ、製作に要した日数は20日程であった。

秋吉公民館の広い講堂で、子ども達をみると、簀と前垂れを大人たちに着つけてもらい、アマメハギの面を手にして子ども達が嬉しそうにはしゃいでいた。子ども達はダウンジャケットなどの防寒具の上から簀と前垂れを着用する。面を被る前に頭には各々フード、白い手ぬぐい、ニットの帽子を被り、マスクを着用し、防寒対策をした上で家々を回っていく。玄関で藁靴ではなくブーツや長靴を履いて外に出て行った。2023年はアマメハギの年齢に該当する中学生の参加者は不在だった。子ども達は全て小学生で、秋吉地区から5人と秋吉地区外から4人（秋吉から他地域に嫁いだ嫁の子を含む）の計9人の男児と女児が参加した。

2023年のタイムスケジュールは下記の通りであった。

1. 15:30～ 秋吉公民館でアマメハギの準備を開始
(15:00頃には集まっていた)
2. 16:30～ アマメハギに扮した子ども達が出発の準備
3. 17:00～ 秋吉内の家々を訪問

2時間で25軒を回る予定

2023年は1班9名の構成で、ここ数年は1班である。班の人数に規定は特になく、2班以上にするかは保護者や地元のリーダーの相談により決まる。アマメハギは雨天決行のため、子ども達は吹雪かれたり、雨で面がぐしゃぐしゃに

なり困ったこともあった。2023年の天候は幸い穏やかであった。秋吉公民館を出る前に「アマメー」の発声練習が行われていた。学年が上の子ども達が、学年が下の子ども達へアマメハギについて教えるのが基本であり、基本的に大人は介在しない。子ども達が自身で考え、お互いに教えていく様は社会性や協調性を学ぶ良い機会であると思われる。

秋吉ではアマメハギが家々を回った後にお疲れ様会のような打ち上げは行わない。立春とは言えまだまだ寒風が吹く季節に、2時間かけて家々を回ったあとでは子ども達の疲労は相当なものであるという。アマメハギに扮するのが青年団や成人であれば宴席が設けられていたかもしれないが、あくまで主体が子ども達である。コロナが完全に収束していない時勢であることも打ち上げが行われない理由の一つであろう。

3-3. 家々を訪問

17時に主催者、保護者、報道陣や観光客に見守られながらアマメハギが秋吉公民館を出発した。足元は竹灯籠で明るく照らされ、幻想的な光景が広がる中、アマメハギが列を組んで歩きだした。小学生の年中の子を筆頭に、真ん中を年少、最後尾を年長と、小さい子ども達を前後に挟むように列が組まれていた。

道中、サイケを出刃包丁でカンカン叩きながら「アマメー」と子ども達は声を出して歩いていった。最初は慣れないのと照れもあってか声が小さかった。後方から我が子を見守っている保護者から「声が小さい！」と声がかかると「アマメー」と声を張り上げるようになった。

秋吉公民館を出て、1軒目の民家に到着すると、玄関で待っていた家の人が子ども達へ袋詰めされたお菓子の袋を配っていた。事前に回る家は決まっており、集落の家々全部を回らないので、1軒目に辿りつくまでに2、3軒ほど竹灯籠が飾られていない民家を見送った。見送られた民家の軒先には「見学の人たちへ」とアマメハギの対象の家ではないため見学を断る内容の貼り紙が貼られていた。

アマメハギを迎える住民は、アマメハギへ次々とお菓子を渡していく。とてもサイケに入りきる量ではなく、付き添いの保護者が用意しているエコバックにお菓子を入れているアマメハギもいた。コロんとサイケに何か落ちる音が聞こえ、そちらに目を向けると「100円もらった～」と、玄関から出てきた年少のアマメハギ（女兒）が保護者に駆け寄っていた。中には青いバケツを持っているアマメハギもいた。同行していた地元の女性に「サイケは持たなくて良いのか」と質問すると「物が入ればサイケでもバケツでもなんでも良い」と返答された。アマメハギを出迎える家の人々の温かい思いと比例するように、保護者が持つエコバックはお菓子や供え物で膨らんでいった。4軒、5軒とアマメハギは順調に訪問しているように見えたが、2時間で25軒を回るには時間的に厳しい。事前に想定していたよりも時間がかかり、長谷氏は「来年は2班に分けるか」と呟いていた。

今回は秋吉地区の秋吉のアマメハギの見学であったが、秋吉地区内でもアマメハギのやり方は異なり、近隣の河ヶ谷はボンボロを叩いて「ウォー」と唸るだけである。参加者は中学生の男子のみで、秋吉と所作も異なる。地域によりやり方が異なっても、アマメハギは子ども達にとって社会学習の機会であることに変わらない。例えば、年長が年少の面倒をみる、感謝の意を込めてお礼を伝える、人と会えば挨拶をする、など社会生活を送る上で求められる術をアマメハギを通して学んでいく。コロナにより外部からの参加者の自粛を求められたが、「外部の人に見せるためにやる」のではなく、「アマメハギがなぜ受け継がれてきたのか」アマメハギを行う意義が改めて認識されたのではなかろうか。アマメハギの本来の意図を核に、柔軟な考えでアマメハギを時流に適して変化させながら継続していくのは、衰退の危機にある民俗行事が継続するヒントになるのではないかと思った。

3-4. 土製仮面とアマメハギ（付論）

真脇遺跡は石川県能登町真脇に位置する、北陸最大級の縄文時代遺跡である。

富山湾に臨み、三方を丘陵に囲まれた小さな入り江の奥の沖積平野に位置している。以前より土師遺跡が存在し、平安時代末期の古文書にもその名が見られていたが、1980年に圃場整備の計画のため、遺跡の分布調査が行われたところ、中～近世の地層の下から縄文時代の地層が発見された。1989年には国指定史跡となり、1991年には出土遺物のうち219点が国の重要文化財に指定されている⁽²⁸⁾。

能登町真脇遺跡縄文館館長高田秀樹氏によると真脇遺跡は拠点集落で、東北、関東、中部地方といった広範囲での交流があったことが発掘した遺物から分かっている。青森県の三内丸山遺跡が東北地方や北海道を繋ぐ交通の主要な集落であり、周辺の集落へ行くための拠点であったように、奥能登から中部地方、関東地方、東北地方へ向かう古くからの交通の要所であった。能登半島の貴重な平野部に位置しており、山と海があり、川も流れ、地下水も豊富で自然の恩恵を十分に受けられる土地である。能登半島は小さな入り江が点々としており、関東や東北のような大きな集落はないものの、人々が居を構え住まうには適した地理的条件が揃っている。

同遺跡で発見された土製仮面は左顔面から鼻にかけて残っていた。右顔面と顎は欠けており、復元すると、能面くらいの大きさになると推測される。土製仮面の出土例は少なく、東日本に偏っている。仮面の出土地域がアマメハギや面様年頭が伝承する地域と、ナマハゲが伝承する男鹿半島と一致しているが具体的な因果関係は不明である。

仮面は古来より世界各国に伝わり、使われる目的や用途は様々である。アマメハギは海を越えて他所からきた季節の変わり目を告げる来訪神である。縄文時代に造られた土製仮面をアマメハギと称するかどうかは別として、仮面がもたらす民俗儀礼における神秘性が増すツールの一つであるのは今も昔も変わらないのである。

おわりに

少子高齢化に伴い民俗行事の担い手が減少する中、追い打ちをかけるように新型コロナウイルスの感染拡大が文化の伝承の困難さに拍車をかけた。人類の歴史は疫病との闘いといっても過言ではなく、今後もこのような疫病が世界中に流行し、その度に文化の伝承をどのように継承するかという課題に当たりつづけるであろう。

打開策の一例として、本論ではユネスコ無形文化遺産に登録された「来訪神 仮面・仮装の神々」の一つである石川県能登町秋吉地区秋吉に伝わるアマメハギを軸に、コロナ渦中で民俗行事がどのように行われ、アフターコロナを見据えてどのように伝統を継承しているのかを、フィールドワークと北國新聞などの文献からまとめた。

2020年初頭は日本ではコロナがそれほど感染していなかったため例年通り一連のアマメハギに関する行事は行われたが、2021年と2022年は地区により対応が分かれた。アマメハギに限ったことではないが、民俗行事の担い手となる若い層が帰省の自粛で参加ができなくなったので、2023年からは感染状況を鑑みながら、徐々に報道機関や観光客の受け入れを再開した。

秋吉のアマメハギがコロナ渦中でも開催されたのは、アマメハギに扮するのが子どもであること、元々玄関先までしか入らないこと、行事そのものが小規模であることなど、幾つもの要因が重なっている。神輿やキリコを担ぐなど不特定多数の大人数の人々が集まり密になる民俗行事では開催は困難であった。これらを考慮しても、病気への抵抗力が弱い子ども達がアマメハギに扮し、各家々を回るのはリスクが伴う。アマメハギを受け入れる側も然りである。そのため、報道機関や観光客の受け入れを自粛し、地元の人々により本来のスタイルのアマメハギが行われた。アマメハギの存続を考慮すれば年に一度のチャンスを外部に公開したいというせめぎ合いから一歩引いた結果、民俗行事が何の目的で誰のために伝えられているのかについて改めて考える契機になった。

特に秋吉の取り組みを追っていくと、コロナ渦中に限らず時代の流れに応じ

て柔軟にアマメハギも変わっている。成人男性のみの参加から、男児の参加へ、男児のみの参加から女兒も参加へ、さらにアマメハギを地区の出身者に限定せず、アマメハギに関心があれば地区外からの参加を認めている。アマメハギの保存会を早くに立ち上げ、活動拠点を造り、地域住民のコミュニケーションも兼ねて子ども達へアマメハギを伝えていく。地元だけでなく他の地域へ出張授業まで行い、アマメハギを知ってもらおうと紙芝居やアマメハギの実演も行っている。昔ながらの地域のルールに縛られず、アマメハギを存続させるために実に様々な取り組みが行われている。一見、他の地域でも真似ができそうではあるが、地元の伝統という縛りの枠を外せず、既存のやり方を尊重し、その結果民俗行事そのものの担い手を失い継続できない事例は後をたたない。

不測の事態に直面してから改善策を考えるのではなく、常に先手を打ちながら現実に起きている問題と対峙していく。民俗行事の伝統を重んじるのは大切ではあるが、時代に沿わないやり方は新しい世代の若者には受入れられず、後継者や担い手不足となり、結果として民俗行事が存続できなくなる。多少やり方が変わっても根底にある民俗行事を行う意義とは何か、原点回帰を通し、民俗行事を続けていく道を見出すのが大切である。コロナ渦中でもアマメハギが継続できたのは、いち早く時代の流れを汲み取り、参加者の層を広げ、他の地域にも受け入れを広げていたので、アマメハギの土台が崩れず、コロナ渦中という怒涛の時代にも柔軟に対応したのである。アマメハギの構成団体や地域住民が、アマメハギを行う意義を根底に一貫した方向性を繋ぎ続けた経緯がある。大人達がアマメハギを存続しようと工夫している姿を見ている子ども達は、その想いを大人になっても受け継いでいくのだろう。

民俗行事の規模や関わる構成団体の数や関わる人々が多ければ多いほど変化は困難を伴い、継続は難しく、簡単にはいかないのが現状である。特に規模が大きくなれば民俗行事そのものにかかる資金もからんでくる。スポンサーの意向を無視する訳にもいかないし、様々なジレンマが想定される。それを踏まえた上で、誰にとって何のための民俗行事であるか原点回帰をすべきなのではな

いか。2020年2月の来訪神サミット、2022年12月に意見フォーラムが開催されたように、次世代を担う若者の意見を聞いたり、専門家などの外部と相談したり、同じような悩みをもつ民俗行事の団体同士で相談をして、客観的にその地域が担う民俗行事を見直すのも重要である。

時代は刻々と変化するし、今後も我々が想定しえない不測の事態が起こる可能性は十分にある。変化を恐れず、各々が柔軟に考えることが民俗行事を後世に残す鍵となると考える。

【註】

- (1) 能登国・輪島 重蔵神社「行事・神事」
<https://juzo.or.jp/schedule/> 2023.10.2 閲覧
- (2) 中村祐監修（2011）『図説 能登の歴史』郷土出版社
- (3) 文化庁「重要無形民俗文化財 能登のアマメハギ」
<https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails/302/60> 2023.10.2 閲覧
- (4) 馬場宏（1979）『能登の方言 第2集』馬場宏（出版）
- (5) 秋吉地区河ヶ谷のアマメハギは安政元年生まれで明治29年に没した中川某の時代にはすでにあった。サイケの代わりにサイコズツと呼ばれる竹で作られた蓋つきの容器が使われ、サイコズツで叩きながら「オー」となるような大声を上げる。
内浦町史編纂専門委員会編（1982）『内浦町史 第2巻 近世・近現代・民俗』北國出版社
- (6) 広報うちうら（1973）「左義長・あまめはぎを後世に 保存会長に前田孫太郎さん」第170号
- (7) 広報うちうら（1980）「伝統あるあまめはぎ行事に 魅力ある部落づくりを あまめはぎ保存会」第248号
- (8) NOYO+2018.3「春を呼ぶ能登の来訪神 アマメハギ」
<https://www.town.noto.lg.jp/open/prnoto/0000013765.pdf> 2023.10.13 閲覧
- (9) 門前町アマメハギ編集委員会編（1981）『門前町のアマメハギ』門前町教育委員会
- (10) 石垣悟監修（2021）『来訪神ガイドブック』来訪神行事保存・振興全国協議会事務局
- (11) 川村清志（2022）「来訪神の現在－能登のアマメハギを中心に」學士會會報No953（2022-II）學士会
- (12) 門前町アマメハギ編集委員会編（1981）『門前町のアマメハギ』門前町教育委員会

- (13) 小倉学(1967)「能登のアマメハギ考」日本民俗学会会報(51)、日本民俗学会
- (14) 門前町アマメハギ編集委員会編(1981)『門前町のアマメハギ』門前町教育委員会
- (15) 川村清志(2022)「来訪神の現在－能登のアマメハギを中心に」學士會会報No953(2022-II) 學士会
- (16) 数馬公(2006)『能州能都町物語二』北國新聞社出版局
- (17) 輪島市観光協会「厄よけの神事 面様年頭」
<https://wajimanavi.jp/event/mennsama> 2023.10.2閲覧
- (18) 「能登の里山里海」世界農業遺産活用実行委員会「祭礼神事」
https://www.pref.ishikawa.jp/satoyama/noto-giahs/lib_bunka_sairei.html
2023.10.18 閲覧
- (19) 能登國・輪島 重蔵神社「行事・神事」
<https://juzo.or.jp/schedule/> 2023.10.2 閲覧
- (20) 「能登の里山里海」世界農業遺産活用実行委員会「面様年頭(メンサマネントウ)」
http://noto-satoyamasatoumi.jp/detail.php?tp_no=83 2023.10.2 閲覧
- (21) 輪島キリコ会館「アマメハギ 面様年頭 展示スタート」
<https://wajima-kiriko.com/> 2023.10.3閲覧
- (22) Discover Noto 「【輪島市】能登を代表するキリコを学べる「輪島キリコ会館」」
<https://discover-noto.com/2537> 2023.10.3閲覧
- (23) 厚生労働省「新型コロナウイルス感染症の現在の状況と厚生労働省の対応について(令和2年12月31日版)」
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_15828.html 2023.10.16 閲覧
- (24) 内閣官房「感染拡大防止に向けた取組」
<https://corona.go.jp/proposal/> 2023.10.16 閲覧
- (25) 中日新聞Web「輪島で「能登のアマメハギ」 玄関に「面様ござったぞ」」
<https://www.chunichi.co.jp/article/179706> 2023.10.14 閲覧
- (26) 節分の日は固定ではなく、2021年は2月2日であった。2月3日でないのは1984年2月4日以来37年ぶり、2月2日になったのは1897年2月2日以来124年ぶりである。
国立天文台「節分の日が動き出す」
https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/topics/html/topics2021_2.html 2023.10.2 閲覧
- (27) 感染症対策のため秋吉地区の4集落のうち1集落で開催されなかった。
中日新聞 北陸新聞ニュース「「アマメー」玄関先で」
<https://www.chunichi.co.jp/article/195992> 2023.10.2 閲覧

(28) 北國新聞社出版局編 (2018) 『能登の里山里海めぐり』北國新聞社

本論の執筆にあたり奥能登の皆様にご多大のお世話になりました。

能登町秋吉地区の秋吉公民館館長・秋吉遊休農地対策部会事務局長谷信一氏には、秋吉公民館にてアマメハギの展示物を丁寧に説明して頂き、新聞や資料だけでは補足しきれない多くの情報を頂いた。長谷信一氏の助力がなければ、秋吉地区のアマメハギの詳細についてここまで知ることはできなかった。心より感謝申し上げます。

秋吉公民館でアマメハギの衣装製作に携わっている秋吉在住の女性（80代）からは、アマメハギの衣装の製作についてお話を聞かせて頂いた。簔と前垂れを製作するにあたり、子ども達の成長に合わせて細やかな配慮をしていらっしゃるのを知り、子ども達への思いやりがアマメハギの根底を支えているのだと改めて痛感した。

取材を通して、アマメハギを後世に残したい、伝統を大切にす能登半島の人々の思いが執筆する原動力になった。本論が少しでもアマメハギや他の民俗行事の存続に役にたてばと切に願う。

最後に、本論を作成するにあたり元東洋大学大学院でフリーライターの甲村綾香氏の多大な協力を得た。改めて感謝の意を表明する次第である。

本論の脱稿後の2024年1月1日、能登地方に大地震が起きた。被災された方々に心からお見舞い申し上げます。

(すがね ゆきひろ 本学教授)